

[研究ノート]

英語語彙における二重語の意味の差異化（第5回） —ラテン語起源（2）

安 達 一 美

英語の語彙史を研究していると、人の一生を辿って伝記を書く作業と似ていると感じることがあります。赤子は無から突然生まれるということはありません。両親がいて、その両親にはまたそれぞれ親がいる。それぞれの親のDNAを受け継ぎながら、一人の人間が成長していきます。英語の単語にも似ている側面があります。単語がどのように生まれて、どのような意味を発達させたのかを調べることは、語源や英語に入ってくる過程を詳しく検討してその語に合ったDNAを調べることを意味します。

二重語とは、語源が同じであるにもかかわらず異なる形態と意味をもつ語として一言語に存在する一対になっている語で、まさに同じDNAを受け継いでいます。二重語が生じる要因のひとつに、他の言語から語を借入することに柔軟であることがあげられます。まさに英語はさまざまな言語から多くの語を取り入れています。語源が同じでも、英語に入ってくる経路の言語が異なるために借入時から意味が異なった別語として存在したり、また、異なる時期に複数回にわたって借入したために先に入った語がすでに意味を発達させて差異化が進んだりして、二重語になっています。

シリーズ第5回目となる今回の研究ノートは、前回に引き続きラテン語起源の二重語を取り上げます。比較的使用頻度の高い語を選んでみました。語源となる一つの語から諸言語を経由して英語において二重語となった語に、どのような意味の差異化が生じているか、語の歴史を探求してみましょう。

respect（尊敬、尊重）vs. **respite**（一時的中断、猶予）

この二重語は、ラテン語動詞*respicere*の過去分詞*respectus*が語源である。*respicere*は接頭辞*re-*（後に）と*specere*（見る）が組み合わせられて形成された語で、意味は「後ろを見る、周りを見る；考慮に入れる、熟考する、（助けを）当て

にする」である。

respectはラテン語からの直接借入で14世紀に英語に入っている。初期においてはラテン語の成句*habere respectum* (have respect)、*sine respectu* (without respect) を英語に置き換えたものが主であった。to have respect (関係がある) は、15世紀後半に「見ることで注意を払う」「注目する」の意味が付け加わるが、17世紀前半に廃義となり、16世紀中ごろには、「考慮に入れる」が付け加えられた。without respect (差別しないで、区別しないで) は16世紀半ばから、with respect (比較的、適当な釣合いで) は16世紀末から使われるようになるが、それらの意味は廃義となり、前者は「考慮に入れずに」、後者は「関連して」の意味で残っている。

「(人やもの・事に対して示される) 敬意」の意味は、16世紀後半から使い始められ、現在ではこの語義が第一義になっている。この意味の発達により、to have respect for (を尊敬する) や、to have the respect of… (に敬われる)、to pay one's respects (敬意を表する)、to pay one's last respects (最後の敬意を表する、葬儀に出席する) の表現が生まれる。with (all due) respect (…には失礼ですが) は敬意を払いながら意見の違いを示すための丁寧語として19世紀半ばごろから使われるようになった。

respectに「関係」の意味が発達したのは16世紀後半から末であるが、17世紀前半に廃義となっている。しかし、成句としてas respects (…に関しては) やin respect of/to (…に関して) の用法は今も使われている。in respect of (…に関して) は、初めは「…と比較して」の意味で14世紀に使われ始め、16世紀と17世紀では頻繁に使われていたが18世紀中ごろには廃用となる。「比較」の意味ではなく「…に関して」の意味での使用は16世紀ごろからで、現在に至っている。**respect**に「(人やもの・事に対する) 差別、不公平、ひいき」の意味が16世紀前半に発達した。**respect of persons**は「特別待遇、えこひいき」を意味する。

15世紀半ばには二重語の**respit**の意味でも使用されるが16世紀半ばに廃義となっている。この他、廃義となった語義も多く、「地位・身分」は17世紀初めから中ごろまで用いられたが廃義となっている。また、「意見・見解」の語義は17世紀後半に一時期に使われた後に廃義になる。

respitは、語源のラテン語から古フランス語**respit** (中断, 遅延, 延期) (Mod. F *répit*) を経由して、「(考慮によって与えられた) 延期」の意味で、**respect**よ

りも早い時期の13世紀末に英語に入る。to put in respiteは「延期する、猶予する」の意味になる。respiteは14世紀には「(労働・苦しみ・戦争の)一時停止」の意味を発達させて今に至っている。なお、14世紀後半から15世紀初頭にかけてrespect, regard, comparisonの意味で用いられるがその後は廃義になっている。「絞首刑の)執行猶予」は18世紀の初めごろから使われるようになる。15世紀から16世紀後半までの間、respectとrespiteの中間的な形態として、respete ([名詞] 一時的中断、[自動詞] 中断する、話を止める、[他動詞] 保留する、延期する)が存在した。

語源であるラテン語動詞respicereの語幹specereから生まれた語を、英語は多く取り入れている。13世紀にはspecial (特別の)、spite (悪意)などを、14世紀にはspectacle (見世物)、especial (特別な)、aspect (外観)、suspect (怪しいと思う)などを、16世紀にはspecies ((分類上の)種)、spectator (見物人)、speculate (熟考する)、auspice (前兆)、conspicuous (人目を引く)、expect (予期する)などを、また17世紀にはinspect ((欠陥がないか)詳しく調べる)などを借入している。

specialの語源はspecereの名詞派生語speciēsで「見ること、外見」を意味するが、比喩的な意味の発達により「特色的なもの、個体、種」の意味が加わった。英語には名詞species (種、種類)として借入しており、spice (薬味)はこの語の二重語である。ラテン語において、その後に形容詞派生語speciālis (特有なタイプの)が生じ、13世紀に英語にspecial(e)として取り入れられ、specialになる。他のゲルマン系言語にも取り入れられており、オランダ語speciaalはフランス語specialより、ドイツ語spezialはラテン語よりの借入である。ちなみに、especialはspeciālisから古フランス語especialを経由して14世紀に借入されている。

spiteは、specereと接頭辞dē-(下に)で形成されたdēspicere (見下ろす)の過去分詞dēspictusが語源である。古フランス語despit (軽蔑、悪意)を経て、despit (侮蔑、恥をかかせること)として13世紀に借入し、頭音消失によりspiteになる。in spite of は15世紀初頭ごろより「ものともせず、にもかかわらず」の意味で使用されるようになる。

ラテン語respicereはインド・ヨーロッパ祖語*spek-(見る)に遡ることができる。この祖語がギリシア語では子音が入れ替わり*skep-となり、英語のskeptical (懐疑的な)やscope ((能力・理解・調査などの)範囲)として取り

入れている。またゲルマン祖語では*spex-となり、英語のspyやespionageをもたらした。spyは、ゲルマン祖語からフランク語で*spehōnとなり、古フランス語espierを経て、動詞spyは「密かに見張る」の意味で13世紀中ごろに、名詞spyは古フランス語で名詞派生したespieを経て「密かに人を見張る人」の意味で動詞と同じ時期に英語に入る。espionageは、ゲルマン祖語から古イタリア語spioneを経て、フランス語 (espion (spy)) に入り、派生によりespionner (to spy) からespionnage (a spying) と変化し、「諜報活動」の意味で英語に入る。

major (大きいほうの) vs. mayor (市長)

この二重語の語源は、ラテン語*māior* (いっそう大きい、より偉大な) で *magnus* (大きい) の比較級である。*magnus*から*magnitude* (大きいこと、マグニチュード：地震の大きさを示すスケール)、*magnum* (大酒ビン、[商標] (拳銃の) マグナム) などが英語に入っている。

majorは、二者のうちでより大きいことを示す添え名としての用法で、中英語期にラテン語から直接借入される。OEDの初出はa1400の*Stacions of Rome*の*seinte Marie pe maiour* (=Santa Maria Maggiore) であり、世界の聖堂の中でも特に重要で母なる教会の意味をもつ名前である。

アメリカ合衆国及びカナダの30球団からなるMajor League Baseball (MLB) は北アメリカで最上位に位置するプロ野球リーグである。OED初出は1942年となっている。現在のMLBは1969年のアメリカプロ野球100周年に野球記録特別委員会によりNational Leagueを初めとする6プロ野球リーグがMajor Leagueとして認定されたものである。

もともとmajorは形容詞で借入するが、軍の将校の位 (「少佐」) に使った名詞用法は17世紀からで、フランス語*major*からの借入した*sergent-major*の短縮形である。国王とその配偶者に用いる敬称のMajesty (閣下) は*māior*名詞派生語*mājestās* (偉大さ、尊厳、卓越) に由来する。majority (大多数) は中世ラテン語*mājōritās*からフランス語*majorité*を経由して16世紀に英語に入った。

majorは人名にも用いられる。イギリスの第72代首相の名前が、Sir John Roy Majorである。彼は保守党のMargaret Hilda Thatcher首相の後任として選ばれ、前任者の構造改革を引き継いでその手法であるPrivate Finance Initiativeと呼ばれる政策手法を実施した。Major元首相は高校を中退して大学には進学してい

ないという学歴の持ち主で、彼が首相に選出されたことは階級社会のイギリスにおいては異例であると言われている。

mayorは、フランス語**maire**を経由して、「地方自治都市における行政の長の称号」として、中英語期の13世紀末に英語に入る。この称号は、イングランドを初めとして、アイルランド、イギリス連邦及びアメリカで使用されている。スコットランドで勅許自治都市の長の称号として用いられていたが、現在ではprovostが取って代わっている。なお、イギリス・ロンドンの市長は、1963年のCity of Londonを包含したGreat London設置に伴い、Mayor of London（大ロンドン市長）とLord Mayor of London（ロンドン市長）がいる。前者がGreat Londonの行政権を持ち、後者はCity of Londonの市長で名誉職の色彩が濃くて被選挙人はSheriffs of the City of Londonの経験者に限られている。

amiable (人当たりのいい) vs. **amicable** (友好的な)

後期ラテン語の**amicābilis** (友情のこもった、好意ある) が、この二重語の語源である。このラテン語は**amicus** (友) から派生した形容詞である。この語がフランス語に「和解の、示談の上の」を意味する法律用語**amiable**として取り入れられる。**amicus**から英語に伝わった語に、**amity** (親睦、友好関係) がある。**amity**は、ラテン語**amicus** (友) から生まれた**amicitia** (友情、親交) が俗ラテン語***amicitāte(m)**を経て、フランス語**amitié** (友情、友好関係) となり**amytie** (国家間又は個人間の友情、友好関係) として中英語期の15世紀半ばに英語に入る。

amiableは、フランス語**amiable**から、中英語期の14世紀に**amiabul**, **amyable**として入り、意味は「(人が) 友好的な、親切な」または「(行為、言葉が) 好意的な、思いやりのある」であった。これらの意味は、フランス語**amable**の影響と考えられている。このフランス語はラテン語**amāre** (愛する) の派生語**amābilis** (愛されるのにふさわしい) から取り入れた語である。**amiable**の人に関しての意味は15世紀に廃義となる。16世紀に「愛すべき」の意味が付け加わるが、この意味も18世紀には廃義となる。これらの2つの意味が混ざった現在の意味の「人に好まれるような気質を持った」という語義は18世紀に発達した。

amicableは、16世紀に後期ラテン語**amicābilis**からの直接借入である。意味もラテン語の原義を保持して「友好的な」であった。**amiable**が人や気質など

に関して「感じがよい、気立てが良い、人に好かれる」を意味するのに対して、amicableは態度・関係・取決めなどが「好意的である、友好的な、平和的な」を意味する。数学用語のamicable numbersは、「友数、親和数」を意味する。これは一対の数で、一方の数の約数から自分自身を除いたものの総和が他方の数となり、後者の約数から自分自身を除いたものの総和も前者の数になるような数の組である。220と284とか、1184と1210、2620と2924などである。たとえば220の約数は、1, 2, 4, 5, 10, 11, 20, 22, 44, 55, 110, 220であり、220以外の合計は284になる。また284の約数は1, 2, 4, 71, 142, 284で、284以外の合計は220となる。この場合220と284は友数と呼ぶ。

tradition「伝統、伝承」vs. treason「裏切り、反逆罪」

この二重語は意味がかなり離れた語で、同じ語を語源としていることに疑問すら感じる。しかし、その要因は語源がもつ意味の多義性にある。この二重語の語源は、ラテン語動詞*trādere*の名詞形*trāditiōnem*（引渡し）である。動詞*trādere*は①「手渡す、譲る」の他に、②「委ねる、任せる」、③「伝える、遺贈する」、④「明け渡す、投げ出す、裏切る」、⑤「言い伝える、述べる」、⑥「没頭する、献身する」の意味が加わっている。名詞*trāditiōnem*にも①「譲ること、譲渡」、②「明け渡すこと、投げ出すこと、降伏」、③「知識・教えの伝達、伝統」と意味が発達している。

treasonは語源の「明け渡すこと、投げ出すこと、降伏」の意味から、古フランス語*traïson*「裏切り」とアングロ・フランス語*treson*「裏切り」を経て、13世紀前半に英語に「裏切り」の意味で入る。ノルマン人は、Norman Conquest以降、多くの国家制度・法律制度・宗教・学問と芸術・食べ物などの語をもたらしたが、**treason**もその一つである。法律用語のhigh treasonは、「国家・国王・王族・政府高官に対する大逆罪・重反逆罪」を意味する。イギリスにおいて反逆罪が法制化されたのは1351年で、Treason Act 1351と呼ばれ、ノルマン・フランス語で書かれている。1215年ジョン王治世のときにイギリス憲法の土台となったMagna Cartaにおいて、**treason**（反逆罪）の場合は国王が罪人の領地及び財産を没収し、felony（重罪）の場合は領主に復帰することが定められた。しかし、この反逆罪の解釈には曖昧性があり、より明確に規定する必要性が生じてエドワード3世王治世の1351年に反逆罪が具体的に明文化された。エドワー

ド3世が、フランス王位継承を主張してフランスに1337年11月に宣戦布告して開始された百年戦争中のことである。この法により従来の反逆罪をhigh treason (大逆罪) と petit treason (小逆罪) に区別した。high treasonは国王及び王国に対する反逆行為で、国王・王妃・国王の長男の殺害を執行または企てた者、王の相手・未婚の長女・長男で王位継承者の妻を陵辱した者、王国内で国王に対して戦争を企てた者、国王の敵に援助を提供して味方した者、現役の大法官・大蔵大臣・裁判官を殺害した者などがその対象となる。petit [petty] treasonは「領主・高位聖職者・主人・夫など目上の者を殺すなどの軽反逆罪」を意味したが、1828年に廃止された。

high treasonは、他のいかなる犯罪よりも重大であるとみなされ、非常に厳しい刑が科せられた。かつては男性は四裂き刑で女性は火あぶりであった。イギリスは1998年に死刑が全面的に廃止されたので、反逆罪の刑は現在では最高刑の無期懲役となっている。イギリスにおける最近の例はWilliam Joyceである。彼は、第2次世界大戦中にナチの宣伝工作を行った行為に対してこの法律が適用され、1946年1月3日に39歳で絞首刑となった。刑の執行に関してはイギリスにおいても随分と議論をかもし出した。

一方traditionは、語源の「手渡す、譲る」と「言い伝える、述べる」の意味で、古フランス語tradicion (伝達、手渡すこと) と中フランス語を経て、英語にはtreasonより1世紀半ほど後の14世紀後半に、tranditionまたはtrandicionとして入る。OED初出はWyclifによる聖書の翻訳においてであり、「(ユダヤ人の間での) 口伝律法、口頭で伝えられた規則」とか「世代から世代に伝えられた信念や実践の言い伝え」の意味で使用されている。この後者の意味が16世紀後半に「長い間に確立して一般的に受け入れられている慣習や手法」の意味が発達し、現在一般的に用いられている「伝統」へと繋がっていった。15世紀後半から17世紀中ごろまで「降服、裏切り」の意味で用いられるが廃義となっている。法律用語の「(財産権の) 移転」は16世紀中頃からのものである。traditionの意味は16世紀にはほぼ確立され、その後に新たに加わった意味はわずかである。

complete (完全な) vs. comply ((要求・命令・規則に) 従う)

この二重語の語源はラテン語動詞*complere* (満たす、不足を補う、完全に

する)の過去分詞*complētus*である。*complēre*は、強調の接頭辞*com-*と「満たす」の意味の*plēre*から形成された語である。基体*plēre*の形容詞は*plēnus*であり、*plenary* (完全な)、*plentitude* (十分、完全)、*plenty* (多量)はこの形容詞に由来している。

complyの英語への借入時期は語源学者によって異なる。BarnhartやAytoは14世紀前半とし、古フランス語*complire*を経て「なし遂げる、実行する」の意味で英語に入るとしている。そして、Aytoは、この語は次第に使われなくなって17世紀にイタリア語からの再借入した、としている。OEDやKleinは、17世紀初頭にイタリア語から「礼儀正しくする」の意味で借入した、と考えている。

ラテン語*complēre*が俗ラテン語で*complire*となり、スペイン語で*cumplir*、ポルトガル語と古フランス語では*complir*、イタリア語で*compire*または*compiere*、と発達する。それぞれの語はラテン語動詞が持っていた語義を保持した。しかし、スペイン語または古カタルニャ語で「欠けているものを満たす、礼儀に必要なものを満たす」の意味が発達し、この意味がイタリア語に16世紀に借入される。このイタリア語が17世紀に英語に入ったと考えられる。

17世紀には**comply**は爆発的な使用の広がりを見せ、意味の発達を見せている。「時にはこびへつらうほどに相手の希望に沿うように親切にする」、*with*を伴い「状況や場に合わせる、順応する」や「意見や慣習に従う」「宗教的・政治的に従う」などである。しかし、これらは全て17世紀から18世紀初頭にかけて廃義となっている。現在用いられている語義は、17世紀半ばごろから用いられ、最初は「(人に)従う」の用法があったが、現在のように「(希望・要望、条件に)従う」が主流となる。

completeは、ラテン語過去分詞*complētus*を14世紀後半に形容詞として「(特質において)欠陥のない、完全な」の意味で直接借入する。OEDでの初出はWyclifで“*his lawe is complete*” (神の法は完全なものである)で用いている。ほぼ同じ頃Chaucerは「(期間や出来事に関して)完了した」の意味で用いている。また、16世紀中頃には「(人に関して)完全に素養を身につけた」の意味が発達し、17世紀には「(行為、状態、質が)完全な」の意味が加わる。現在一般的に用いる「あらゆる必要不可欠な項目等を含み完全な」、「全ての部分や構成要素を持っている」の語義は19世紀中頃の発達である。また、論理学や数学で用いる「形式論理的に、または数学的に、これ以上新たな公理は付け加える

ことができないほどに完全な」は20世紀前半ごろより用いられている。

ラテン語動詞の*complēre*に由来する語には、他に*accomplish*（成し遂げる）、*complement*（補って完全にするもの）、*compliment*（ほめことば）がある。*accomplish*は、このラテン語が古フランス語に入り、そこで強意の接頭辞*a-*が添加された*acomplir*の語幹*acompliss-*から14世紀に英語に入ったものである。また、*complement*と*compliment*は二重語を形成している。語源は*complēre*の名詞派生*complēmentum*である。*complement*は14世紀に「遂行、実行」の意味でラテン語から直接借入され、16世紀までには比喩的な意味が発達し、「完全な紳士になること」から「礼儀上の誉めことば」が発達する。しかし、*complēre*の俗ラテン語**complimentum*を経由して、古カタルニア語*complimento*やスペイン語*cumplimiento*において「礼儀に必要なことを従い実行すること」の意味が発達し、それがイタリア語に*complimento*（ほめ言葉、決まり切った挨拶）として入る。そして、フランス語*compliment*（大げさな賛辞）を経て、17世紀に英語に*compliment*（賛辞、お世辞）が借入され、次第に*complement*の持つ「礼儀上の誉めことば」の語義は新たに借入された*compliment*に譲ることになる。